

## 言語と民族に関するふたつの命題

松尾 雅嗣

広島大学平和科学研究センター

## Language and Nationality: Two Propositions

Masatsugu MATSUO

Institute for Peace Science. Hiroshima University

### SUMMARY

It has long been a matter of debate whether language is a necessary, if not the only, criterion which distinguishes a nationality or a "nation." The present paper is an attempt to clarify the relation of language to nationality. First it is shown that the debate is due partly to the confusion of the terminologies such as "nation," and partly to the misunderstanding of the nature of language. Second it is shown that there are two general propositions involved in the debates whether a nationality can be defined in terms of a language. The two propositions can be formulated as follows: "a group sharing a language is a nationality" and "a nationality share a language." Next, this paper demonstrates that the relationship of language to nationality should be examined at three levels at least, that is, reality, perception and norm. The relationship of a given language to a given nationality should be determined only after the

examination in terms of the two propositions at three levels of reality, perception and norm.

## 1 問題設定

言語が民族を規定する要因たりうるか否かについては、多くの議論がなされている。歴史を遡れば、聖書創世紀のバベルの塔の逸話から始めるべきであろうか。「ギリシャ人以外の諸民族、即ち野蛮人」を意味する古典ギリシャ語のバルバロイが、元来「ギリシャ語以外の言葉をしゃべる者」の意であったことは (Barnhart 1988: 76) , 言語がギリシア人と他の民族を分かつ規準であったことを示す。とはいえ、言語と民族をめぐる議論が本格化するのには、はるか時代を下って、18世紀後半以降のナショナリズムの時代であろう。ヘルダー (Johann Gottfried von Herder) が、言語を民族を規定する多くの要因のうちのひとつと見なしたのに対し、フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte) は言語をとりわけ重視している (Parkinson 1977: 131) 。今世紀に入ってからは、周知のバウアー (Otto Bauer) とカウツキー (Karl Kautsky) の論争がある。バウアーは、民族とは文化的精神的共同性を通じて作り上げられる性格共同体であると主張した。バウアーも勿論言語がこのような共同性を形成するきわめて重要な要因であることは否定しない (丸山 1988: 119, 121-122) 。これに対し、カウツキーはバウアーを批判して、言語と地域こそが民族を規定するものであると主張した (Parkinson 1977: 135, 丸山 1988: 126-128) 。

この論争の成果を汲み取ったのが、『マルクス主義と民族問題』におけるスターリン (I. V. Stalin) の定式化である (丸山 1988: 130, 134-135) 。即ち、

民族とは、言語、地域、経済生活、及び文化の共通性のうちにあらわれる心理状態、の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された、人々の堅固な共同体である (スターリン 1953: 50) 。

しかも、「すべての特徴が同時に存在するばあいに、はじめて民族があたえられる」 (スターリン 1953: 51) として、言語が民族を規定する不可欠の要因であるとする。他方、ウェーバー (Max Weber) は、民族を「共通の言語、あるいは宗教、あるいは共通の慣習、あるいは政治的記憶を共有する人々の強力な政治的共

同体」と定義する (Tiryakian and Nevitte 1985: 64)。ここでは、言語は、その重要性は別としても、民族を規定する要因のひとつに過ぎない。

言語を重視するこのような見解の対極には、「可視的などのような特質も、民族意識の維持には、必須のものではない」(Connor 1987: 202) とする見解もある。

このような議論や論争に容易に決着がつかずもないし、また性急な決着に格別の意味があるわけでもあるまい。しかしながら、言語と民族の関係をめぐることのような議論と民族主義運動、民族紛争における言語の役割を検討するならば、民族と言語の関係についての議論の大多数にふたつの基本的な命題が暗黙の前提として存在することが明らかになる。このふたつの命題を手掛りとして、言語と民族の関係を理解する枠組を提供することが本稿の意図である。

## 2 言語様式

言語と民族の関わりを論ずるためには、予め言語と民族それぞれに関して、予備的な定義を明らかにしておく必要がある。ここでは、まず言語に関して検討を加える。

民族に限らず、人間集団と言語の関係を考えるとき、「言語」という用語は不適切であり、むしろ言語様式なる概念を使用すべきであることは、既に他の個所で明らかにした。言語様式は、「言語を構成する音韻、語彙といった諸構成要素とその結合規則から成る集合」と定義される (松尾 1990: 77-78)。そして、ここで言う言語の構成要素には、文字、正書法なども含むものとする。かつてのソ連、例えば、モルダヴィア共和国におけるように、キリル文字を使用するカラテン文字を使用するかが、決定的に重要な問題となることもあるからである (Eyal 1990: 126-127)。あるいはウクライナにおけるように、ただひとつの文字ですら問題化するからである (中井 1990: 98)<sup>2)</sup>。

言語様式を個人について定義するとき、言語様式を一定程度共有する集団<sup>3)</sup>を言語集団、言語様式の共有部分あるいは論理積となる集合を集団的言語様式と呼ぶことができる。以下、言語様式なる用語は、この意味で用いる。ここで、問題は、ふたつある。

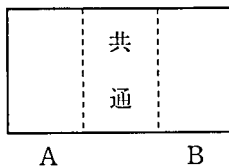
ひとつは、ふたつの言語様式の弁別が如何にして可能であるかという問題である。言語が民族の規定要因であるためには、ある言語様式をひとつ特定し、その言語様式と民族の関係を明らかにしなければならないからである。

他のひとつは、言語様式によって定義される言語集団と民族集団がどの程度一致するかという問題である。これは、民族が言語を共有するかどうかという問題である。

最初の問題に関して言えば、英語と日本語といった明白な例があるにもかかわらず、このような問題を提起するのは、あまりに学術的な議論に見えるかもしれない<sup>4)</sup>。しかし、他方においては、弁別がきわめて困難な事例も数多く存在する（松尾 1990: 77）。しかも、言語と民族の関係が問題となるのは、往々にしてこのような場合なのである。

結論的に言えば、ふたつの言語様式AとBの関係は、一般に、図1に示すように、定性的ではなく、量的であり、しかも確率的に変動しうる（松尾 1990: 79）。ここで注意すべきは、これはふたつの言語様式の差異の実態であり、この実態がどのように認識あるいは解釈されるかは、別の事柄であるということである。ふたつの言語様式の実態としての関係は、図からも明らかのように、共通部分と異なる部分から成る。このことは、ふたつの言語様式の関係の実態は、ふたつの言語様式が同一であるという判断と、異なるという判断のいずれにも、客観的論拠を提供することを意味する。ふたつの言語様式は、同じとも言えるし、異なるとも言えるのである。端的な例をふたつだけ上げておく。19世紀後半、ウクライナ語に関しては、独自の言語であるという認識がある一方で、ロシア語の方言ともポーランド語の方言とも見なされていた（中井 1988: 42, Solchanyk 1985: 58）。同様に、ベロルシア語は、ロシア語、ポーランド語、そしてウクライナ語の方言とも見なされていた（Wexler 1985: 38）。

図1 言語様式の差異



このような事例は、ふたつの言語様式の間を、その実態のみに即して論ずるだけでは不十分であることを示す。即ち、ふたつの言語様式の間がどのように認識されるかという認識のレベルでも検討を加える必要がある<sup>5)</sup>。そして、ふたつの言語様式の間を認識は、一般には、上のウクライナ語とベロルシア語の例のように、同一であるか異なるかという二値に収斂するのが普通である（松尾 1990: 79, 84）。

観点を改めて言えば、ふたつの言語の間を、厳密にはふたつの言語様式の間を、実態としては、複数の解釈を許容する。それは、解釈なり認識が大きな意味をもつということでもある。言語と民族の間を論ずる際の認識の重要性は、言語のこの実態に由来する。逆に言えば、言語のこのような特質からして、言語と民族の間においては、それがどのように認識されるかという問題がきわめて大きな比重を占めるのである。

次に言語集団と任意の集団の間を考えてみよう。この場合、理論的可能性としては、ふたつの極が考えられる。ふたつが完全に一致する場合と、完全に乖離する場合である。民族をアプリアリに言語集団と定義すれば民族と言語集団は完全に一致する。また、民族と言語集団が完全に乖離する可能性は、民族が本来の言語を完全に失ったケースとも解しうる。しかしながら、いずれのケースも、現実にはありえないと考えてよい。従って、民族と言語集団は程度の差はあれ、部分的にしか重なり合わないと考えべきであろう。そして、それゆえに、言語の実態からする限り、言語のみによって民族集団を規定することはできない。

しかしながら、集団と言語集団の間を、認識のレベルにおいては、上述のふたつの極に分解、単純化される傾向がきわめて強い。認識のレベルでは、言語集団と民族はしばしば一致するか乖離するかのいずれかである。この限りにおいて、言語は民族を規定する要因になりうる。

言語集団と民族の間を、実態としては、ここで述べたほど単純ではない。現実には、ふたつの民族が、完全にではないにせよ、言語を共有する場合もある。また、言語のレベルを幾つかに分けて検討する必要もある。民族にとって問題となるのは、母語なのか、第二言語なのか、日常語なのか、あるいはリング・フランカなのか、あるいは標準語なのか、あるいは書き言葉なのか、話し言葉なのか。

従来の議論では、この点はまったく不問に付されている。本稿でも、今後の検討課題として指摘するにとどめ、これ以上立ち入らない。

### 3 民族

民族とは何かに関して最終的な結論を与えることは、本稿の目的ではないが、以下の議論のために、仮説を提示しておく。これに先立って、用語の若干の整理が必要である。

本稿では、「民族」と「国民」は別の概念として使用する。このことは、「民族」と「国民」が現実においても理念においても一致する可能性を排除するものではないが、このふたつの概念の混同が「民族」の理解を阻んできた原因のひとつであることは否定できないからである (Connor 1978: 381-384)。この区別は、コバン (Alfred Cobban) の用語を借りれば、「文化的民族」と「政治的民族」の区別である (コバン 1976: 113-116)。このとき、「国民」とは原理的には主権国家の市民である。即ち、共通の法のもとに生活し共通の立法府によって代表される人々の集合である (Kedourie 1985: 15)。また、ここでは、「国民」が、単なる法的概念を越えて、主権国家に対する帰属意識あるいは忠誠心を有する集団あるいは一種の運命共同体を意味する場合も含みうるものとするが、以下特に論じない。

他方、本稿では、「民族」と「エスニック集団」は区別しない。このような用語法を実質的に採用する論者も少なくない (綾部 1985: 8-9, 古田 1991: 25 など)。また、その有効性を否定するものではないが、「民族体」、「歴史なき民族」、「少数民族」、「先住民族」、「従属的民族」といった下位区分もしない。このような用語法が、例えば、レバノンの紛争に関して、あるいはアメリカにおけるモルモン教徒 (綾部 1990)、イスラエルにおける所謂オリエンタル・ジュー (Rubenberg 1986)、あるいは移民集団について、すべて「民族」なる概念で一括するという難点を孕んでいることは言うまでもないが<sup>9)</sup>、この点には触れない。

また、「民族」が政治集団として機能するか否か、政治化しているか否かは、定義には含まない。民族運動あるいは民族主義運動を考えるとときには、フロフ

(Miroslav Hroch) の非政治的知的関心段階、政治化段階、大衆動員段階という区分 (Hroch 1985: 22-23) が有効であろうが、ここではこの区分はしない。

民族とは、予備的には、次のふたつの要素によって規定される人間の集団であると定義されよう。

客観的特性

共同体意識

以下、言語を念頭におきつつ、このふたつを検討してみよう。民族は、客観的特性を共有する集団である。ここで、客観的特性とは、例えば、祖先、歴史、地域、経済生活、言語、宗教、文化、行動様式等、個人にとって一般に所与であり、一般に世代間に継承される特性を言う。このような特性の一部を「原初特性」として別扱いすることはここでは差し控える。このような特性が民族を規定する特性であるためには、民族の内部に現実に存在する様々な亀裂、例えば、性、階層にかかわらず、共有され、継承されなくてはならない。

このような特性は、可視的な客観的な特質であり、それゆえに民族を規定する客観的根拠となる。しかし、ここで注意すべきは、このような特性を共有することは、後述の議論からも明らかのように、民族の必要条件であって、十分条件ではない。客観的特性は、民族を分ける規準の素材と言うべきものであって、規準そのものではない (Rothchild 1981: 95)。

民族は、スターリンが「すべての特徴が同時に存在するばあいに、はじめて民族があたえられるのである」(スターリン 1953: 51) と断定したのと異なり、上に掲げた特性のすべてを共有する必要はない。例えば、離散集団であったユダヤ人あるいは離散集団であるロマ人を、地域を共有しないが故に、民族でないと言うことはできない<sup>7)</sup>。従って、この段階では、民族とは、客観的特性の幾つかを共有する集団である。

ここで、ふたつの集団がひとつの特性を共有する場合を考えてみよう。ふたつの集団がひとつの特性を共有することは、同一民族であることをまったく保証しない。世界のイスラム教徒がすべて同一民族に属する、あるいは宗派ごとに同一



民族に属するという主張は到底受け入れられまい。オランダ語を共有するベルギーのフランデレン人とオランダ人の関係（津田 1992: 229）も同様である。

このことから窺えるように、民族が共有する客観的特性は、ある民族を他の民族と区別しうるものでなくてはならない。このような機能を果たす特性を弁別特性と呼ぶことにしよう。どのような特性が弁別特性となるかは、その民族の置かれた歴史的状況に依存する。カトリックという宗教を共有するベルギーでは、言語（オランダ語とフランス語）と地域（フランデレンとワロニー）が弁別特性となる。逆に、北アイルランドやレバノンでは、宗教や宗派が弁別特性となる。要するに、問題となるのは、弁別特性なのである。

しかし、この場合、弁別特性は、ある民族を他のすべての民族と区別しうる特性であることを要しない。問題となる他の民族との区別が可能でありさえすればよい。例えば、ケベック人にとって、フランス語は自らと、カナダの英語系住民あるいは英語系諸州を区別する機能を果すが、フランス人とケベック人の弁別には何ら意味をもたない。フランス人とケベック人を区別する必要がないからである<sup>9)</sup>。従って、弁別性とは、民族と他の特定の民族の区別が可能であるという意味に解さなければならない。

とはいえ、現実には、弁別特性あるいはその集合が、ある民族を他のすべての民族から区別する特性であると認識される傾向が強いことも否定できない。換言すれば、弁別特性あるいはその集合が、多くの場合、当該民族に固有の特性であると認識される。

以上の議論から、民族は、弁別的な特性の幾つかを共有する集団であると定義できる。

固有であれ、単に弁別的であれ、特性が弁別的であるためには、弁別特性もしくはその集合  $X$  に関しては、

- ①  $X$  は、当該民族の大多数の成員に関して妥当する
- ②  $X$  は、他の特定の民族の大多数の成員には妥当しない

というふたつの命題が成立する必要がある。即ち、特性  $X$  は、民族の内部に関し

ては均質的であり、外部に関しては異質的でなければならない。別の言葉で言えば、当該民族の構成員は、Xを共有し、他の特定の民族の構成は、Xという特性をもたないという命題が成立する必要がある。

このふたつの命題、即ち弁別特性に関する内部的均質性と外部的異質性が成立しない場合、問題の特性は民族を規定する要因ではないと結論されるか、弁別特性が絶対化されて、当該の集団は民族ではないという結論が導かれる。この種の議論の問題は、弁別特性の問題を実態のレベルでのみ議論して、認識という問題を無視しているところにある。弁別特性と民族の関係の考察に際しては、言語様式の関係、言語様式と集団の関係に際して議論した同じように、実態のレベルのみならず、認識という視角が不可欠である。

例えば、祖先を取って見よう。祖先を共有することは、民族が民族であるひとつの基盤である。しかし、歴史を遡るならば、他の民族との混淆を経験しない純粋な民族を見出すことは困難であろう。この意味では、共通の祖先を民族の規準とするならば、民族は存在しないと断言して誤りではないであろう。勿論、民族に関しては、この祖先と民族の関係を否定することは誤りであると言わざるをえない。但し、誤りは、祖先を共有する集団が現実に存在しないことによるのではなく、ある集団が、現実に祖先を共有していなければならないという前提による。一般化して言えば、弁別特性が事実そのものであり、客観的に妥当するという前提のほうが誤りであると言うべきである。別言すれば、重要なことは、現実ではなくて、人びとが現実であると信じていることなのである(Connor 1987: 205-206)。確かに、可視的などのような特質も、民族意識の維持には、必須のものではないとする見解は、極端に過ぎようが、民族の成員がすべて共通の祖先の子孫である必要はないし、一般的に言って、すべての成員が弁別特性を現実に共有している必要はない。弁別特性を共有すると認識されていることで十分なのである。従って、祖先という弁別特性に関して言えば、民族とは、コナーの如く「祖先の共有の神話を特質とする最大の人間集団」とも言えるが、この神話の「歴史的事実との符合は問題ではない」(Connor 1987: 211)のである。

以上の議論からして、民族を民族たらしめる弁別的な特性は、当該民族の成員によって共有すると認識されていればよく、当該民族の成員すべてに現実に共有

されている必要はない。これは、勿論、現実に共有されていることを妨げるものではない。そしてこのような認識が民族の存在証明となり、成員の行動を左右し、そして政治的に大きな意義をもつがゆえに、このような認識を「神話」と呼ぶこともできるのである。

結論として言えば、民族とは、弁別的な特性あるいは弁別的な特性の集合を共有すると認識されている集団である。

弁別特性に関して、本稿では、先に例示した諸特性が相互に独立であるかのよう、議論した。現実には、弁別特性が他の特性に影響を与えるという特性間の相互作用的側面もある。このような、特性間の相互作用、さらに一般化すれば、弁別特性の可塑性、歴史性については立ち入らない<sup>9)</sup>。

既に明らかにしたように、民族とは、何らかの客観的な弁別特性を共有すると認識されている集団である。それゆえ、民族によって共有される弁別特性の強度ないしは民族としての客観基礎は、実体性ないしは客観性、即ち客観的共有の度合いと、シンボル性ないしは象徴性、即ち共有の認識の度合いの関数として、最も単純には、例えば、その和として、

$$\text{民族の客観性} = \text{弁別特性の実体性} + \text{象徴性 (共有の認識)}$$

と表記できよう。より厳密に定式化するならば、任意の弁別特性 $i$ に関してその客観性 $i$ は、

$$\text{民族の客観性}_i = \text{弁別特性の実体性}_i + \text{象徴性 (共有の認識)}_i$$

と表わされ、民族の客観性は総体としては、弁別特性相互の間には共時的相互作用がないものとするれば、その総和として、

$$\text{民族の客観性} = \sum \text{弁別特性の実体性}_i + \sum \text{象徴性 (共有の認識)}_i$$

と表わされることになろう。

これまでは、民族が客観的存在であるとして議論してきた。勿論、この意味での民族が純粋に客観的存在であるわけではなく、象徴性ないしは主観性に依存する部分も多分にあることは既に述べたとおおりである。これまでの議論は、正確には客観的規準から見た民族に関するものであった。

しかしながら、民族が民族であるためには、「民族の客観性」のみでは足りない。上述の意味での客観性のみを支えられた民族は、民族それ自体 (an sich) であって、民族は自らを民族と自覚した、換言すれば民族意識をもった存在となつて、はじめて民族たりうるからである。即ち、民族は、対自的 (für sich) となつてはじめて民族となるのである。

「民族に関して述べることのできる最も単純な命題は、民族とは、自身を民族と感じる人びとの集団であるということである。そして、これは、精緻な分析を尽くした後得られる最終的結論でもありえよう」(Connor 1987: 203 に引用) というエマーソン (Rupert Emerson) の言葉はここに妥当する。あるいは、ベネディクト・アンダーソン (Benedict Anderson) の言葉を借りるならば、民族とは「想像の共同体」(Anderson 1983: 15) である。

結論的に言えば、民族の成員が、ひとつの共同体に属しているという意識をもつとき、即ち共同体意識をもつときにはじめて、弁別特性を共有すると認識している集団を民族と言っているのである。

以上の議論から、民族とは、何らかの客観的な弁別特性を共有すると認識し、かつそのような弁別特性の外延と一致する共同体に対する帰属意識をもった集団である。

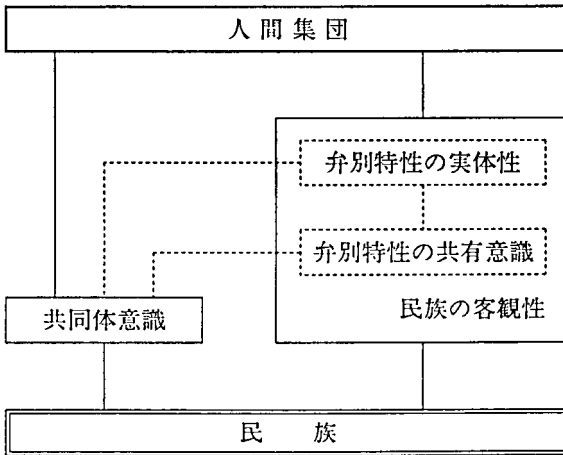
この結論を図式的に示せば、

民族 = 共同体意識 + 民族の客観性

と表わすことができよう。また、図式的には、図2のようなモデルとしても表わすことができよう。なお、図2では、実体性、客観性が認識と意識に影響を与える一方向的モデルが提示されているが、双方向、多方向相互作用モデルもこれに

図2 民族概念のモデル

点線は、影響を示す



準じて考えることができよう。いずれにせよ、この定式は、民族の客観性がたとえ微弱であっても、共同体意識がそれを補うに足るほど強力であれば、民族は成立しうることを意味する。

#### 4 言語と民族に関するふたつの基本命題

以上きわめて単純な形で定義した言語様式と民族の概念を用いて、言語と民族の関係性を再検討してみよう。

従来の議論を整理すれば、一方の極には、英語を共有するイギリス人<sup>10)</sup>とアイルランド人は明確に別個の民族である、従って、言語は民族を区別する弁別特性とはなりえない、あるいは、異なる民族は言語を異にするという議論がある。また、他方の極には、ルーマニア人とモルダヴィア人は、それぞれルーマニア語とモルダヴィア語を母語とし、言語を異にするから別個の民族である、一般化して言えば、言語を異にする集団は、別個の民族であるという見解がある。このふたつの

議論に含まれる命題は、図3に掲げた異質性命題と共有性命題というふたつの命題として整理できる。

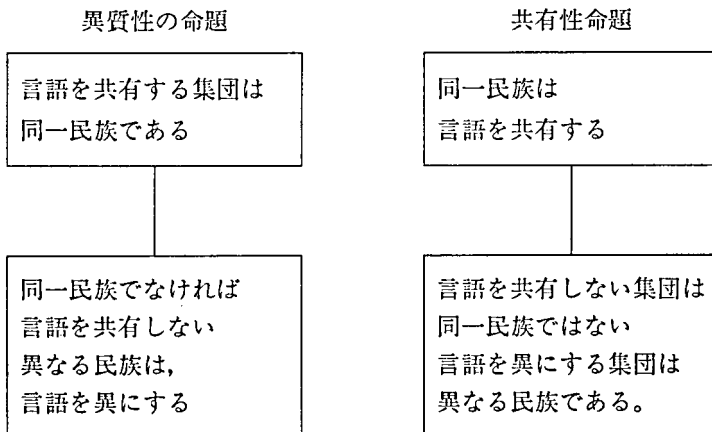
このふたつの命題は、それぞれ他方の命題の逆の命題である。そして、このふたつの命題がそれぞれ成立すれば、それぞれの命題の対偶となる図の下に示された命題もまた、それぞれ真である。逆もまた真である。さらに、ふたつの命題の真偽は、独立である。

「言語を共有する集団は同一民族である」という異質性命題は、その対偶を取って「異なる民族は言語を異にする」とすることもできる。異質性命題と呼ぶ所以である。

他方、「同一民族は言語を共有する」という共有性命題は、対偶をとって「言語を異にする集団は異なる民族である」とすることもできる。モルダヴィア民族をルーマニア民族と分かつのがこの論理である。

民族の弁別特性としての言語に関するこのふたつの基本命題の真偽に関して言えば、既に示唆したように、実態のレベルのみならず、認識あるいは事実認識のレベルと、さらに規範というレベルを含め、3つのレベルで検討する必要がある。この3つのレベルでの真偽の混同が往々にして非生産的な論争と概念の混乱と事

図3 言語と民族に関するふたつの基本命題



態の誤解を生み出してきたと言っても過言ではないからである。以下、異質性命題と共有性命題に分けて検討する。

## 5 異質性命題

「言語を共有する集団は同一の民族である」あるいは「異なる民族は言語を異にする」という異質性命題を取り上げてみよう。

実態としてこの命題が成立しない例は多い。

よく知られた事例は別として、近年の例をひとつ上げるとすれば、満州族の事例であろう。満州族は、近年その生活様式を漢化させ、風俗習慣だけでなく、言語までも固有のものを失い、民族集団としてすらもはや存在しないと言われるようになった（平野 1988: 35, 60）。満州語は死語と化した（河内 1992）。にもかかわらず、今日、中国の全土には1000万人近い満州族がいるとされる<sup>11)</sup>。満州族は、今日、「<民族感情>によってのみ、民族の存在を維持しつつ、エスニック・アイデンティティが存在することを満族は示した」（平野 1988: 91 に引用）という意味で民族とされる。ここで「民族感情」とは、「同一民族の人間が、自分以外の人々を一個の人間共同体に属する自分の仲間であると感ずる心理」（平野 1988: 85-86）である。これは、われわれがすでに考察した民族成立の要件のひとつである「共同体意識」にほかならない。確かに、吉林省の山村で5,000人の満州族が原始的な満州語を話していることが「発見」されているが（平野 1988: 89）、これをもって、数百万満州族の言語と見なすわけにはいかない。言語を規準とする限り、満州族の民族としての存在を認めることは困難である。この意味で、満州族の場合、言語を規定要因と見なすことはできない。

しかも、実態においてのみならず、認識においても満州語が満州族の言語であるという意識も見られないようである。それゆえ、異質性命題は、満州族の場合、実態においても認識においても成立しない。満州族の場合、「同一民族は言語を共有する」という共有性命題は、漢語を共有することによって成立するが、弁別的でないことからして民族の客観的基礎としては意味がない。

次に、かつて民族と言語に関する論議においてしばしば事例として引照された

アイルランド人とイギリス人の関係を検討して見よう。アイルランド人とイギリス人がともに英語を用いることは、客観的な事実として概ね認めてよいであろう<sup>12)</sup>。その意味で、実態としては異質性命題は成立しない。しかしながら、1921年にアイルランド自由国として、49年には共和国としてイギリスからの独立を達成したアイルランド民族運動が、アイルランド語（ゲール語）をシンボルとして、その再生をひとつの旗印にしたことはよく知られている。アイルランド語はアイルランド民族の紛れもないシンボルであった（Connor 1972: 338）。現実には使用されているか否かにかかわらず、アイルランド語を自らの民族が共有する弁別的言語と認識するか否かがアイルランド民族であるかを規定する要因となっているのである。先に、民族の客観性を、実体性と象徴性の和として示したが、アイルランド民族の場合、少なくとも言語に関する限りでは、実体性は微弱であるとしても、象徴性の強さによって全体としての客観性の強さを維持しえている。そして、この限りにおいて、アイルランド語は、アイルランド民族の弁別的な特性なのである。アイルランド民族の場合、言語様式に関して、実態としては、異質性命題は成立しない。しかし、認識の上では、異質性命題は確実に成立したと言える。再び、アンダーソンの言葉を借りるならば、アイルランド民族は、アイルランド語を共有する「想像の言語共同体」なのである。

他方、「アイルランド民族がアイルランド語を共有する」という共有性命題に関して、どうであろうか。1893年に設立されアイルランド民族運動の重要な一翼を担ったとされる「ゲール連盟 (Gaelic League)」がアイルランド語の日常語としてのまた文章語としての発展を目標としていたことからしても（Hindley 1990: 21-23, Hutchinson 1987: 164-165）、この命題は実態としてのみならず、認識の上でも成立していなかったと判断すべきであろう。しかし、このことは、逆に、またひとつ異なるレベル、即ち規範のレベルでの民族と言語の関係の考察を要求する。これは、実は、独立後のアイルランド語の問題である。そして、これは、言語の造成あるいは国家や支配的言語集団による言語的斉一化の政策につながる問題を孕んでいるが、これについては、別稿に譲らざるを得ない。

アイルランド民族の例に見られるように、民族と言語の関係は、単に実態のみならず、認識や場合によっては規範という視角から考察しなければならないこと



が明らかである。異質性命題が、実態としては成立しなくとも、認識のレベルで成立すれば、言語様式は、民族の象徴的弁別特性となるからである。以下、同様の事例を二、三上げておく。

ひとつは、ハンガリー王国の例である。18世期末ハプスブルク皇帝ヨーゼフ2世は、ラテン語に代えてドイツ語を帝国の言語とすることを試みた (Lehiste 1988: 57、シュタットミュラー 1989: 105)。当時、ハンガリー語 (またはマジャール語) は、農民の言葉であり、エリートである貴族の間では、消滅寸前であった。貴族の言葉はラテン語やドイツ語であった (南塚 1989: 161、シュタットミュラー 1989: 132)。しかし、ヨーゼフ2世のこの政策は、ハンガリー貴族の間に激しい反発を引き起こし、民族意識を覚醒させる契機となった。しかもそれは、ハンガリー語を前面に押し出したものであった (バラニ 1981: 197-198、南塚 1989: 162、シュタットミュラー 1989: 133)。ここにヘルダー以来のロマン主義的ナショナリズムの影響を見ることもできるが (シュタットミュラー 1989: 128-130)、注意すべきは、実態としてはハンガリー語をほとんど弁別特性としないハンガリー貴族層が、ヨーゼフ2世のドイツ語化政策への対抗という意味はあったにせよ、ハンガリー語を、あるいはハンガリー語を話すことを民族の弁別特性として選んだという事実である。この例でも、象徴性において言語が民族の弁別特性となる事例を見ることができる。ここでは、「言語を異にする集団は異なる民族である」という異質性命題が明らかに成立するものと認識されている。それゆえにこそ、ハンガリー語というドイツ語とは異なる言語が弁別特性として措定されるのである。

他方、歴史的には、民族と国民の同一視を前提とする「同一民族は言語を共有する」という命題を規範化した所謂マジャール化政策が、クロアチア人、ルーマニア人、スロヴァキア人など王国内の非ハンガリー語集団の反発と民族的覚醒を促すことになる (バラニ 1981: 196-198、南塚 1989: 162)。

アイヌ人についても、「固有の文化、就中言語を失ったが故にもはや民族ではない」との議論が繰り返行なわれていると言われる (大塚 1990: 39、山川 1989: 21-22)。仮に言語であれ、あらゆる弁別特性を失ったとしても、なお民族が民族たりうることは、既に明らかにした通りである。こと言語に関して言えば、「アイヌ語が民族の存在と結束を支えている」 (山川 1989: 24) という主張さえあ

る。実態としてはともかく、認識のレベルで考えれば、アイヌ語は、アイルランド語やハンガリー語がアイルランド人やハンガリー人にとってそうであったように、アイヌ民族の象徴的弁別特性として機能しうる。

カナダのアラブ移民についても、全体として、若者たちの間でアラビア語は失われつつある。しかし、アラビア語の喪失が、アラビア文化、アラブ民族のアイデンティティを失うことにはつながっていない。アラビア語は、コーランの言葉、神の言葉であり、重要な価値をもつ言語と考えられている。日常言語としてのアラビア語は消えつつあっても、文化的な「価値言語」としてのアラビア語は、むしろ、意識的に強く保持されていると言われる（片倉 1987: 723-724, 片倉 1990: 247-248）。

上述の事例から明らかなように、言語は仮に民族の実体的弁別特性でないとしても、象徴的弁別特性たりうるのである、片倉の言う価値言語たりうるのである。これこそ、多くの議論が見過ごしたり、漠然と前提とした点である。しかも、「想像の言語共同体」にあっては、問題となる言語様式は、現実に民族の母語であることを要しないのである。

## 6 共有性命題

次に「同一民族は言語を共有する」あるいは「言語を異にする集団は異なる民族である」という命題を検討してみよう。民族と言語集団に関して、既に明らかにしたように、この命題が、実態として、厳密な意味で成立する場合は、むしろ稀である。逆に実態としても、認識の上でも、明らかに成立しえない事例もまた存在する。

ひとつは、1960年代末から民族独立運動を展開した（山影 1988: 194）、フィリピン南部のイスラム教徒モロ民族である。モロ民族とは誰かという問題は残るとされるものの、モロ民族は、南部フィリピンミンダナオ島などに居住する、13あるいはそれ以上の言語集団から成るムスリムが圧倒的多数を占める集団である（山影 1988: 204-206）。モロ民族の場合、13あるいはそれ以上の数の言語を総体としてみれば、これまた言語的には必ずしも斉一的ではない（Gonzalez 1991:

112-114)。カトリックの北部フィリピーノ集団(山影 1988: 210)と弁別的であるという主張がありえようが、言語系統からして、13の言語は、例えば、ケルト系諸言語といったグルーピングは不可能であり、なかには、北部の言語との距離に比べて、相互的に遥かに距離の大きいものすらある(Ruhlen 1987: 340)。従って、もし、言語の共有が民族の規準であるとするならば、「モロ民族」は存在しえないことになる。ここでは、共有性命題は、実態としても認識として成立しない。

ダゲスタンの状況は、モロ民族に似ているがより微妙な例である。ダゲスタンの場合、ひとつの共同体に帰属しているという意識は今日も強いと言われるが、他方で言語をはじめとして、ひとつの民族であることを妨げると思われる要因も少なくない<sup>13)</sup>。例えば、言語をとってみよう。ダゲスタンも、典型的な多言語地域(Bennigsen and Lemerrier-Quelquejay 1985: 126, 131)である。ダゲスタン民族に関しては、実態としても認識としても、共有性命題は成立しない。共通の生活様式、歴史的伝統、スンニ派イスラム教といった要素が、ダゲスタンの民族としての一体性を支える要素であると言えよう。但し、言語について一言付け加えるならば、母語そのものではなく、18世紀以降のアラビア語と後のアゼリ語という、文語および口語としてのリング・フランカが、ダゲスタンの一体性に大きく寄与したと言われる(Bennigsen and Lemerrier-Quelquejay 1985: 131)。この意味では、母語ではなく、リング・フランカのレベルで、共有性命題が実態あるいは認識の上で成立していたとも言えなくはないのである。

このような事例から明らかなことは、既に指摘したように、民族と言語の関係を論ずるためには、母語、日常語、リング・フランカ、標準語といった言語の異なる位相のそれぞれに関して検討しなければ、誤った結論を引き出すことになりかねないということである。

さらにひとつ歴史的事例を付け加えておこう。ロシア帝国政府は、19世紀後半以降、ウクライナ語を禁圧したが(中井 1988: 27-30)、その理由として次のような発言が見られる。曰く、「別個独自のウクライナ語の追求は、本当のところはウクライナのロシアからの分離の要求である」(中井 1988: 28)、「[ウクライナ語訳聖書の]出版を許可すればウクライナ語に独立言語の地位を与えること

になり、その結果、ウクライナ人に政治的自治の要求の論拠を与えることになる」(中井 1988: 29) 等々。ここに見られる「ウクライナ語の存在を認めることは、ウクライナ民族の存在を認めることである」という論理の前提となるのは、明らかに「言語を異にする集団は、異なる民族である」という共有性命題である。

## 結論

以上見た如く、言語が民族の弁別的特性たりうるか否かに関しては、一義的な結論は存在しない。個々の事例に即して考察すべき問題である。しかしながら、個々の事例の考察に際しては、本稿で提示したふたつの基本的命題、即ち異質性命題と共有性命題が、有効な引照規準となることは明らかである。しかも、このふたつの命題は、民族の客観的基礎が、単に実体性のみによって支えられるものではなく、象徴性によっても支えられるものである限り、ただ実態においてのみならず、認識においてもまた、検証さるべきである。しかも、言語、厳密には言語様式に関しては、母語のみならず、リング・フランカ、標準語といった位相に関しても、同様の検証が必要である。このような、複数の視点と視角を組み合わせた分析を経てはじめて、個々の民族にとって言語がどのような弁別機能を果たしているか、あるいはないかを明らかにすることができる。従来議論が、特定の視角からの分析をもって事足りりとしていたことは、本稿に示した数少ない事例の分析からも明らかであろう。

本稿では、論ずる余裕がなかったが、上記ふたつの命題は、加えて規範としても検証さるべきである。この点に関する本格的な分析は、続稿に委ねるほかないが、本論を補足する意味で、今後の分析の方向を若干示唆しておこう。

このふたつの命題が、規範として成立するとき、それは、民族の弁別特性の実体化とも言うべき運動や政策を生み出す。社会言語学の言う「言語計画」(Cooper 1989: 45) がこれである。民族の弁別特性としての言語の実体性を強化するという意味での実体化は、具体的には、様々な形態を取りうる。

例えば、エンゲルスの言う「歴史なき民族」の場合、まず言語の存在を証明することから始めなければならなかった。「歴史なき民族」は、ウクライナ民族や

ペロルシア民族がかつてそう見なされたように、言わば「言葉なき民族」でもあったからである。「諸民族の牢獄」に閉じ込められた多くの民族は、それゆえ、まず、自らの言語を定立することから始めなければならなかった。そのためには、文法や語彙や作詩法を確立するだけでなく、しばしばその前提として文字と正書法を確立する必要すらあった（オーキー 1987: 105-106）。このような努力のうちに前提されているのは、「言語を異にする集団は異なる民族である」という共有性命題である。この前提の下では、民族の存在を実証する最も強力な手段は、言語の存在を証し立てることだからである。

言語の実体化は、異質な外来要素を言語から排除する純化運動としても現われる。古くは、トランシルヴァニアのルーマニア人学者達が、ルーマニア語の語彙のラテン語起源を明証するため、非ラテン語起源の語彙を辞書から除いて純化し、キリル文字の使用に反対した例がある（Rogers 1981: 232-233）。ヒンディー語とウルドゥー語の分化もこのような純化運動の結果である（Chaklader 1990: 62）。

実体化は、また、「異なる民族は言語を異にする」という異質性原理に則っても行なわれる。この典型的な例が田中克彦の言う「言語の造成」（田中 1981: 160-162）である。モルダヴィア社会主義共和国の成立とともに、ソ連はこの地方のルーマニア人をモルダヴィア人と呼び、その言語もルーマニア語とは異なるモルダヴィア語なる名称を冠し、独立した言語であるとした。しかもルーマニア語とは異なり、キリル文字表記に変更した（田中 1981: 163-164, Rogers 1981: 235）。1814年デンマークから独立したノルウェーが自己の言語様式を新たにノルウェー語と称したのも（田中 1981: 160）、この例である。

実体化は、逆に「同一民族は言語を共有する」という共有性命題を規範としても行われる。民族と国民が同一視されるとき、これは国内少数言語集団に対する支配的言語への強制的同化政策として発現する。マジャーリ化政策についてはすでに触れたとおりであるが、規模と程度の差はあれ、類例は枚挙に暇がない。

ここで示した規範レベルにおける言語と民族の関係は、例示した事例からも窺えるように、本稿では扱わなかった国家という問題と密接な関わりをもつ。これは、言語と国家という次元の異なる検討課題である。

## 註

- 1) ナショナリズムの起源をいつの時期に求めるかという議論、例えば、フランス革命とナポレオン戦争以後とするか否かといった議論には、ここでは立ち入らない。
- 2) ソ連体制におけるチュルク系諸言語をはじめとするロシア語以外の言語に採用された文字の変遷とその意義に関しては、他に、カレール＝ダンコース 1981: 66-67, Lazzarini 1985: 116-117, 山内 1986: 295-297などを参照。周知のセルビア語とクロアチア語の関係、あるいはデヴァナガリ文字で書かれるヒンディー語とペルシャ＝アラビア文字で書かれるウルドゥー語の関係なども文字が大きな意味をもつ事例である (Campbell 1991: 1425, Shackle and Snell 1990: 1, 511-512)。文字について言えば、スペインでは、国内で販売されるコンピュータのキーボードにスペイン語のÑ (エニユ) を付けることは是非が問題化した (朝日新聞 1991年6月3日)。
- 3) 複数の個人の間で、言語様式が完全に共有されるという事態は、理論的可能性としては勿論認めざるをえない。しかし、個人言語 (idiolect) あるいは個人の文体といった言葉が示すように、なにがしかの相違が存在するのが常態であろう。
- 4) 英語と日本語とて、その識別は常に明白であるとは限らない。例えば、

No money nara no can yo.  
(ノーマネー なら 駄目 よ)  
Us Japan come wakaran.  
(われわれ 日本から 来たものは わからん)  
(いずれも、小林 1989: 164)

といった類の、ハワイに移住した日系一世達の言語は英語であろうか日本語であろうか。この類のビジンとクレオールは世界のあらゆるところに存在する。例えば、Romaine 1988: Appendix I のリストを参照。
- 5) 認識という観点を必要とする論拠となる他の事例については、松尾 1990: 80-81 を参照。
- 6) 宗教について言えば、ボスニアのムスリム人 (柴 1989: 241, 243, 252), グルジアのアジャール人 (Bennigsen and Wimbush 1985: 207), ブルガリアのボマック (Minority Rights Group 1989: 118) など「民族」と呼称される例もある。移民集団の場合、「民族」という呼称が用いられる例も少なくない (綾部 1985: 15-16)。そのうえ、元来インド各地からのしかも言語を異にする移民集団から成り (Siegel 1987: 132, Table 6-1, 141 Table 6-5), インド本国であれば、ボジプuri (Bhojpuri) 人, ビハール (Bihari) 人など別個の民族とされるはずの集団から成るインド系フィジー人 (小柏 1992: 193-194, Siegel 1987: 4) のように、新たな「民族」が形成されるケースもある。
- 7) カウツキー、レーニン、スターリンが地域を強調した背景には、ユダヤ人を民族として認知しないという意図が働いていたとされる (田中 1978: 150-152)。
- 8) 言語に関して、もしその必要があれば、フランス語に対して、フランス語のケベック方言あるいはケベック俗語 (juoal) (Weinstein 1989: 54, 57-58) といった対比が行なわれるであろう。

- 9) ひとつだけ例を上げておくと、例えば、パンジャブでは、パンジャブ語を話すヒンドゥー教徒のなかには文字としてはヒンディー語の文字を使用するものがしだいに増え、またシク・コミュニズムへの対抗上センサスの際にヒンディー語を母語と申請する者も多く現われた。このようなことから、シク＝パンジャブ語、ヒンドゥー＝ヒンディー語といった分極化がしだいに進行した(広瀬 1989: 265)。
- 10) ウェールズ人や、スコットランド人を含むイギリス人なる民族が、本稿で定義した意味で存在するか否かはここでは差し当たり問題ではない。
- 11) 満州族人口の推移に関しては、平野 1988: 86-87, 加々美 1992: 326 参照。
- 12) 厳密に言えば、次に示すように、英語ではなくアイルランド語を日常言語とするゲールタハトのアイルランド語集団が存在する。

| 人口 (千人) |     |
|---------|-----|
| 1926    | 247 |
| 1956    | 64  |
| 1976    | 29  |

出所: Fennel (1990), 34-36 より作成

なお、1981年に人口の約3分の1に達するアイルランドにおけるアイルランド語使用者の統計は、母語や日常言語ではなく、第二言語としてのアイルランド語使用者を含むものである(Hindley 1990: 21, 23)。この場合も、母語や、日常言語ではなく、言語能力という観点からすれば、アイルランド人が英語を話すと、単純には言えないことになる。

- 13) さらに、垂直的言語選択とも言うべき言語集団間の非対称な言語使用の実態もある。ダゲスタンの場合には、遅れた高地と、進んだ低地という地理的に垂直的な言語使用の状況が見られる。集団間の政治的経済的社会的優劣関係を反映して、コミュニケーションの手段としてより優位な集団の言語様式が採用され、従属的集団の非対称的二言語使用が行なわれる(Bennigsen and Lemerrier-Quellejay 1985: 131)。

## 引用文献

- Anderson, Benedict (1983), *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London: Verso
- 綾部恒雄 (1985) 「エスニシティの概念と定義」, 『文化人類学』, 2: 8-19
- 綾部恒雄 (1990) 「モルモン (アメリカ) — 宗派から少数民族への過程」, 『文化人類学』, 7: 102-113
- バラニ, ジョージ(1981) 「ハンガリーのナショナリズム」, P. F. シュガー・I. J. レデラー (編) (東欧史研究会訳) (1981) 『東欧のナショナリズム: 歴史と現在』 (東京: 刀水書房), 193-256
- Barnhart, Robert K. (ed) (1988), *The Barnhart Dictionary of Etymology*, New York: The H. W. Wilson Company

- Bennigsen, Alexander and Chantal Lemerrier-Quellejey (1985), "Politics and Linguistics in Daghestan," Kreindler (ed) (1985), 125-142
- Bennigsen, Alexander and S. Enders Wimbush (1985), *Muslims of the Soviet Empire: A Guide*, London: Hurst
- Campbell, George L. (1991). *A Compendium of the World's Languages*, 2 vols, London: Routledge
- カレル＝ダンコース, エレーヌ (高橋武智訳) (1981), 「崩壊した帝国：ソ連における諸民族の反乱」, 東京：新評論
- Chaklader, Snehamoy (1990), *Sociolinguistics: A Guide to Language Problems in India*, New Delhi: Mittal
- コバン, アルフレッド (柴田卓弘訳) (1976) 「民族国家と民族自決」, 東京：早稲田大学出版部
- Connor, Walker (1972), "Nation-Building or Nation-Destroying?" *World Politics*, XXIV (3): 319-355
- (1978), "A Nation is a Nation, is a State, is an Ethnic Group, is a ...." *Ethnic and Racial Studies* 1(4): 377-400
- (1987), "Ethnonationalism," Myron Weiner and Samuel P. Huntington (eds) (1987), *Understanding Political Development: An Analytic Study* (Boston: Little, Brown and Company), 196-220
- Cooper, Robert L. (1989), *Language Planning and Social Change*, Cambridge: Cambridge University Press
- Eyal, Jonathan (1990), "Moldavians," Graham Smith (ed) (1990), *The Nationalities Question in the Soviet Union* (London: Longman), 123-141
- Fennell, Desmond (1990), "Can a Shrinking Linguistic Minority be Saved?: Lessons from the Irish Experience," Einar J. Haugen et al (eds) (1990), *Minority Languages Today* (Edinburgh: Edinburgh University Press), 32-39
- 古田元夫 (1991) 「ベトナム人共産主義者の民族政策史」, 東京：大月書店
- Gonzalez, Andrew (1991), "Cebuano and Tagalog: Ethnic Rivalry Redivivus," James R. Dow (ed) (1991), *Language and Ethnicity: Focusschrift in Honor of Joshua A. Fishman on the Occasion of His 65th Birthday*, Vol. 2 (Amsterdam: John Benjamins), 111-129
- Hindley, Reg (1990), *The Death of the Irish Language: A Qualified Obituary*, London: Routledge
- 平野健一郎 (1988) 「中国における統一国家の形成と少数民族 — 満州族を例として —」, 平野他 (1988), 33-105
- 平野健一郎・山影進・岡部達味・土屋健治 (1988) 「アジアにおける国民統合：歴史・文化・国際関係」, 東京：東京大学出版会
- 広瀬崇子 (1989) 「南アジア — バンジャープ紛争とインドの国民統合の課題 —」, 有賀貞他 (編) (1989) 「講座国際政治 3：現代世界の分離と統合」 (東京：東京大学出版会), 261-282



- Hroch, Miroslav (1985), *Social Precondition of National Revival in Europe: A Comparative Analysis of the Social Composition of Patriotic Groups among the Smaller European Nations*, Cambridge: Cambridge University Press
- Hutchinson, John (1987), *The Dynamics of Cultural Nationalism: The Gaelic Revival and the Creation of the Irish Nation State*, London: Allen and Unwin
- 加々美光行 (1992) 「知られざる祈り：中国の民族問題」, 東京：新評論
- 片倉もところ (1987) 「異文化環境におけるムスリム — カナダにおけるアラブ・ムスリム社会の形成」, 『国立民族学博物館研究報告』, 12(3): 681-726
- (1990) 「アラブ (カナダ) — アラブ移民集団から「ムスリム」集団へ」, 『文化人類学』, 7: 236-250
- 河内良弘 (1992) 「生きた満州語をたずねて」, 朝日新聞, 1992年6月19日
- Kedourie, Elie (1985), *Nationalism*, London: Hutchinson
- 小林素文 (1989) 「複合多民族国家と言語問題」, 東京：大修館
- Kreindler, Isabelle T. (ed) (1985), *Sociolinguistic Perspectives on Soviet National Languages: Their Past, Present and Future*, Berlin: Mouton de Gruyter
- Lazerzini, Edward (1985), "Crimean Tatar: The Fate of a Severed Tongue," Kreindler (ed) (1985), 109-124
- Lehiste, Ilse (1988), *Lectures on Language Contact*, Cambridge, Mass: MIT Press
- 丸山敬一 (1988) 「民族の定義をめぐる — パウアー・カウツキー・スターリン」, 猪木正道先生古稀祝賀論集刊行会 (編) 『現代世界と政治 — 猪木正道先生古稀祝賀論集』 (京都：世界思想社), 117-137
- 松尾雅嗣 (1990) 「言語的差異：現実, 認識, 不平等」, 『広島平和科学』, 13: 73-99
- 南塚信吾 (1989), 「ハンガリー — アジアからヨーロッパへ」, 南塚信吾 (編) (1989), 139-167
- (編) (1989) 『東欧の民族と文化』, 東京：彩流社
- Minority Rights Group (1989), *World Directory of Minorities*, Essex: Longman
- 中井和夫 (1988) 「ソヴェト民族政策史：ウクライナ 1917-1945」, 東京：お茶の水書房
- (1990) 「ウクライナ — 静かな弟?」, 山内昌之他 (1990) 「分裂するソ連：なぜ民族の反乱が起こったか」 (東京：日本放送出版協会), 72-112
- 小柏葉子 (1992) 「島嶼国フィジーにおける「国民統合」 — 「先住民」・「移民」と階層分化」, 百瀬宏・小倉充夫 (編) (1992) 『現代国家と移民労働者』 (東京：有信堂), 193-211
- オーキー, R. (1987) 『東欧現代史』, 東京：勁草書房
- 大塚和義 (1990) 「アイヌ (日本) — 民族的復権と自立をめざして」, 『文化人類学』, 7: 39-48
- Parkinson, F. (1977), *The Philosophy of International Relations: A Study in the History of Thought*, Beverly Hills: Sage
- Rogers, Kenneth H. (1981), "Studies on Linguistic Nationalism in the Romance Languages,"

- Rebecca Posner and John W. Green (eds) (1981), *Trends in Romance Linguistics and Philology, vol.2 Synchronic Linguistics* (The Hague: Mouton), 228-256
- Romaine, Suzanne (1988), *Pidgin and Creole Languages*, Essex: Longman
- Rothchild, Joseph (1981), *Ethnopolitics: A Conceptual Framework*, New York: Columbia University Press
- Rubenberg, Cheryl A. (1986), "Ethnicity, Elitism, and the State of Israel," John F. Stack Jr. (ed) (1986), *The Primordial Challenge: Ethnicity in the Contemporary World* (New York: Greenwood Press), 161-184
- Ruhlen, Merritt (1987), *A Guide to the World's Languages Vol. I: Classification*, Stanford, CA: Stanford University Press
- Shackle, Christopher and Rupert Snell (1990). *Hindi and Urdu since 1800*, London: School of Oriental and African Studies, University of London
- 柴宜弘 (1989) 「ユーゴスラビアの民族」, 南塚 (編) (1989), 235-262
- Siegel, Jeff (1987), *Language Contact in a Plantation Environment: A Sociolinguistic History of Fiji*, Cambridge: Cambridge University Press
- Solchanyk, Roman (1985), "Language Politics in the Ukraine," Kreindler (ed) (1985), 57-105
- シュタットミュラー, ゲオルグ (丹後杏一訳) (1989, 1966) 「ハプスブルク帝国史: 中世から 1918年まで」, 東京: 刀水書房
- スターリン (1953, 1913) 「マルクス主義と民族問題」, 平沢三郎訳 「マルクス主義と民族問題他十編」 (国民文庫), 43-135
- 田中克彦 (1978) 「言語からみた民族と国家」, 東京: 岩波書店
- (1981) 「ことばと国家」, 東京: 岩波書店
- Tiryakian, Edward A. and Neil Nevitte (1985), "Nationalism and Modernity," Edward A. Tiryakian and Ronald Rogowski (eds) (1985), *New Nationalisms of the Developed West: Toward Explanation*, Boston: Allen and Unwin: 57-86
- 津田由美子 (1992) 「戦間期ベルギーにおける言語問題の展開」, 「国家学会雑誌」, 105(5・6): 189-230
- Weinstein, Brian (1989), "Francophonie: Purism at the International Level," Bjorn H. Jernudd and Michael J. Shapiro (eds.) (1989), *The Politics of Language Purism* (Berlin: Mouton de Gruyter), 53-79
- Wexler, Paul (1985), "Belorussification, Russification and Polonization Trends in the Belorussian Language, 1890-1982," Kreindler (ed) (1985), 37-56
- 山影進 (1988) 「フィリピン・ムスリムのナショナリティとエスニシティ」, 平野他(1988), 189-223
- 山川力 (1989) 「政治とアイヌ民族」, 東京: 未来社
- 山内昌之 (1986) 「スルタンガリエフの夢」, 東京: 東京大学出版会